

小松左京戯曲集

宇狐宙人

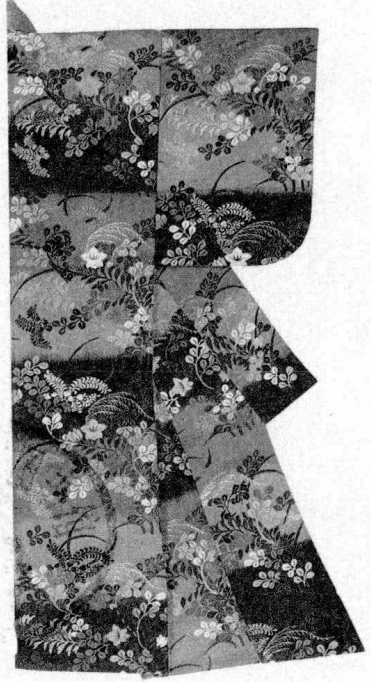
小松左京

小松左京戯曲集

狐と宇宙人

小松左京

徳間書店



狐と宇宙人

一九九〇年一月三十一日 初刷

著 者 小松左京

発行者 荒井 修

発行所 株式会社徳間書店

〒105 東京都港区新橋四―一〇

電話 東京(四三三)六二三二

振替 東京四―四四三九二

印刷所 株式会社清水印刷所(本文)

近代美術株式会社(カバー)

製本所 ナシヨナル製本

定価は帯・カバーに表示してあります。
乱丁・落丁本は本社またはお買い求めの
書店にてお取り替えいたします。

©Sakyô Komatsu 1990 Printed in Japan.

〈編集担当 芝田 暁〉

ISBN4-19-124124-9

目次

SF狂言 狐と宇宙人	三
オムニバス・ドラマ 三つの「明日」	二五
えすえふ歌舞伎 まつとつるなにわのさやあて 松登鶴浪花鞘当	三九
短小浦島	一九
四次元オ コ	三三
SF講談 アンドロメダ戦記	三九
SFと舞台芸術	四八

装幀・矢島高光

S F 狂言

狐と宇宙人

シテ 宇宙人B——太郎冠者の服装に、はじめ銀ラメのごく短いマント。あとで、ソフトをかぶり、

小さな鞆をもつ。鞆の中に水色の大布あり。小道具に通信器。

アド 宇宙人A——黒の兜頭巾、黒の長マントをはおる。「スター・ウォーズ」のダース・ヴェイダーの態。

アド 狐——狐面、とりはずしあり。鼠木綿、筒袖、たっつけ袴、あとソフト、眼鏡。

つくりもの——円盤、自動車、テレビの枠。自動車は後部のみ腰高から下に布をたらす。

(次第)へ百千の星に領^{うしは}きて、百千の星にうしはきて、天の河をもとろうよ。

宇宙人A (次第の囃子で登場。常座で) これはオリオン星雲のあたりにすまいたす、悪い宇宙人
でござる。われら、日ごろちかくの生き物のすむ星をつぎつぎとせめとり、まわり百光年ほどは、
あらかたせめとつてござるが、このたび千五百光年ほどはなれた太陽という星のまわりに、地球
という生き物のすむ星が見つかったによって、せめいる前に、誰ぞ間者をものみに行かせて、様
子をさぐらせようと存ずる。ヤイヤイ、誰かあるかやい。(と、脇座へ行く)

宇宙人B ハァー。(と、常座へ出る)

宇宙人 A まいったか。

宇宙人 B おん前に。

宇宙人 A 念のう早うまいった。呼び出したは余の儀ではない。この度、われらが星より遠くはなれたあたりに、太陽という恒星が見つかった。

宇宙人 B ハハア。

宇宙人 A 聞きおよびおるか。

宇宙人 B なかなか。

宇宙人 A その恒星のまわりをめぐる地球という星には、生き物がすんでおる。

宇宙人 B ハハア。

宇宙人 A 聞きおよびおるか。

宇宙人 B 聞きおよびまする。何でも、そこにすむ人間は、姿かたちは、われらによう似るとの事でござりまする。

宇宙人 A おう、よう聞きおよんだ。われら、日ごろまわりの星々をせめとり、あらかたせめとつたによつて、つぎはその地球にせめいつてせめとろうと存ずる。それにつき、せめいる前に、誰ぞ間者をおくりこんで、地球の様子をさぐらせようと存ずる。

宇宙人 B ハハア、間者をおくりこんで、地球の様子をさぐらせまするか。

宇宙人 A なかなか。

宇宙人B それはよい考えにてござります。

宇宙人A よい考えと思うか。

宇宙人B いかにも名案にござります。してその間者は、誰をおくりします。

宇宙人A 汝いてまいれ。

宇宙人B 私が。

宇宙人A なかなか。

宇宙人B それはご免なされて下されい。今日た、こんにち某が女房との結婚記念日によつて、私それがしがずいぶ

んな馳走をいたさねばなりませぬ。いたさねば女房が私ののだ笛をくいちぎります。

宇宙人A さてもさても、むさとしたことじゃ。結婚記念日ぐらい、主のいいつけをきけぬようなや

つは、今ここで、はらわたひきずり出してくりよう。

宇宙人B 今ここで、はらわたひきずり出されますか。

宇宙人A なかなか。その上汝の頭から塩をかけて、わりわりとくうてしまう。

宇宙人B なに、私の頭から塩をかけて、わりわりとくわれまますか。

宇宙人A なかなか。

宇宙人B さてさて苦が苦がしいことじゃ。行けば女房にのど笛をくいちぎられ、行かねば主どのに

はらわたひきずり出され、おまけに頭から塩をかけてくわれてしまう。恐ろしや恐ろしや。イヤ、まことにどうしたものか。

宇宙人 A ソリヤソリヤ、いまはらわたひきずり出してくりようぞ。いま、頭からかもうぞ。（と、

Bをおいまわす）

宇宙人 B （逃げまわって） ああ、こらえてくだされ。こらえてくだされ。まいりまする。まいりまする。

宇宙人 A ならば地球へまいるか。

宇宙人 B まいりまする。

宇宙人 A すぐまいるか。

宇宙人 B まいりまする。まいりまするによって、どうかこらえてくだされい。

宇宙人 A ならばこらえようほどに、すぐ行け。

宇宙人 B すぐまいりまする。

ヤレヤレ、あやうい事であった。もう少しで頭からくわれる所であった。何はさて、命びろいしたが、地球というても、それほど遠いことではあるまい。ちやっ^やと行って、夕餉^{ゆうげ}までにちやつと帰り、それから馳走ないたせば、女どもにのど笛^{どふえ}くいちぎられずともすむであらう。

もうし、頼うだお方。

宇宙人 A なんじゃ。まだ行かぬか。

宇宙人 B いま行きます。いま行きますが、その地球という星は、これよりのくらいみちのりがござりまするか。

宇宙人A　されば、ざっと千五百年がほどじゃ。

宇宙人B　なに、千五百年——それはまた遠国おんこくにござりまする。

宇宙人A　遠いがどうした。

宇宙人B　あまり遠いと、夕餉にかえれませぬ。帰れねば、女房にのど笛いちぎられます。もつと近いところに、生き物のすむ星がござりませぬか。

宇宙人A　ないによつて地球に行けと申しつける。行かずばこの場で頭から。

宇宙人B　ああ、まいります。まいります。はてさて迷惑しごくな事じゃ。

宇宙人A　ヤイヤイ、早うまいらぬか。

宇宙人B　ハァー。

宇宙人A　何をいたしておる。早う乗物の用意をいたせ。

宇宙人B　ハァー。(と、円盤のつくりものをもって正中にくる)

宇宙人B　この乗物でようござりまするか。

宇宙人A　おう、それでよい。その円盤型の宇宙船なら、早う行けるであろう。

宇宙人B　それではちやうと行つてまいります。(と、つくりものにのりこみ、杵をもちあげかけ
る)

宇宙人A　やれ待て。

宇宙人B　待ちまするか。

宇宙人A 行かせる前に、大事なことをいいわすれていた。

宇宙人B 何でござりまする。

宇宙人A 地球という星へついたら、くれぐれも水というものに気をつけい。

宇宙人B ハハア、水——水とはどんなものでござりまする。

宇宙人A 水とは、ひたひたと冷たいものじゃ。これがわれらの体につくと、体がとけてしまう。かえすがえすも恐ろしいものじゃ。

宇宙人B 何、その水とやという、ひたひた冷たいものが、われらの体につくと、体がとけてしまいきまするか。

宇宙人A なかなか。

宇宙人B それはかえすがえすも恐ろしい事でござる。して地球という星には、その水とやらがござりまするか。

宇宙人A たくさんあるらしいによつて、心して行け。

宇宙人B イヤ、それはあやうい事でござる。心して行きまする。

宇宙人A むこうへつけば、まず地球人に化け、ほんものの地球人が、いかようなやつばらで、いかような力を持ちおるか、とくとしらべてまいれ。

宇宙人B 心得まいだが、地球人は、恐ろしいやつばらでござりまするか。

宇宙人A 恐ろしいか恐ろしくないか、いまだわからぬによつて、それをしらべてまいるのじゃ。

宇宙人B 地球人は、いかような力を持っておりまするか。

宇宙人A それがわからぬによって、それをしらべてまいれと申すのじゃ。

宇宙人B さてもさても難儀な事じゃ。地球には水という恐ろしいものがある。さわればみどもが体がとろける。地球人はいかような力をもっているかもしれぬ。早う行つて夕餉までにかえらずば、女房にのど笛くいちぎられるが、恐ろしい地球人につかまればすぐにはかえれぬであらう。行くのがだんだん恐ろしくなつたが行かずば、

宇宙人A へ行かずば、この場で頭から。

宇宙人B 行きます行きます。——イヤまったく迷惑なことでごさる。

宇宙人A 早う行け。

宇宙人B ハァー。

宇宙人A エーイ。

宇宙人B ハァー。(と、つくりものをもちあげ)さらば、ひとつとび、地球へ行つてまいります。

(と、円盤を左右にかたむけ)ヒョウ、フルフル、ヒョウ、フルフル。

宇宙人A ヤイヤイ待て。

宇宙人B また待ちまするか。(と、つくりものを下におく)

宇宙人A なかなか。地球へその円盤でとんで行くに、ヒョウ、フルフルではあやしまれる。

宇宙人B ならばなんといたしまする。

宇宙人 A 円盤の事を地球では、U F O^{ユーフォ}とやら申す由、よってユーフォ、ユーフォと申してとんでま

いれ。

宇宙人 B ハハア、ユーフォ、ユーフォと申してとんでまいりまするか。

宇宙人 A なかなか。

宇宙人 B それは慮外の事でござる。

宇宙人 A 早うとばしめ。

宇宙人 B 心得まいた。

(と、能管、大小にて、ピンク・レディーの“U F O”のメロディとリズムをうちこむ)

宇宙人 B (ピンク・レディーのポーズできまつて) U F O^{ユーフォ}!

宇宙人 A ヤイヤイ、ヤイ、それは何じゃ。

宇宙人 B 地球からつたわってくる、テレビの電波で見た、めぐしい歌い女^めどものふりにござりまする。

宇宙人 A さてもさてもむさい事じゃ。そのような物狂^{おつきやう}な事をいたしておらず、早う行かしめ。

宇宙人 B いかにも行かしめましようが、なれぬかけ声ゆえ、ちととばしにくうござる。お前さま、はやしてくれまするか。

宇宙人 A ならばはやそうほどこに、早うとばしめ。

宇宙人 B 早うはやしめ。

宇宙人 A ならばはやすぞ。

宇宙人 B ならばとばすぞ。

（囃子）

宇宙人 A へ天の河、金波銀波の星々に、さおさしのべて、とぶ船の。

宇宙人 B ユーフォ、ユーフォ。

宇宙人 A へさおさしのべてとぶ船の、行方も知らぬ、水尾みなおかや。

宇宙人 B ユーフォ、ユーフォ。（と、まいつつ、二人、地謡座にくつろぐ）

狐

（登場して常座でなめる）これはこの所に久しくすまう狐です。このあたりの山々に、かねて眷族けんぞく累類るいあまたすみならわしたるに、おいおいに道も開けて、人間どもが、自動車などというおそろしげな車を、夜昼よひるなしに走らすによつて、同類はもとより兎、猪、狸まで、ひき殺されて迷惑ごんじやういたす。よつて今日た、日の暮るるを待つて、通力によつて人間に化け、道のかたえのみぞろが池を自動車に見せかけて、通りがかりの憎い人間をたらかいてうちこんでくりようと存ずる。イヤ、何かといううちに、おいおいに日も暮るる。そろそろ化けずばなるまい。（と、狂言座に行く。面をはずし、ソフトをかぶる）

宇宙人 B （脇座へ行く）さてもさても、こちらの頼うだ人のように、ものを急に仰せ付けらるるお方

はござらぬ。それも、肩をもめの、背中をかけのというならともかく、行くに事かいて、千五百光年もはなれた地球まで、ちゃつと行て、ものみてまいれとは、まっこと悪い宇宙人の主につかえるのは、迷惑な事でござる。

イヤ、とやこう申すうちに地球へついた。円盤を山の中へかくいて、そろりそろりとさぐりにまいろう。(ふと自分の姿を見て) イヤ待て、このままの姿では、地球のものに、ひと目で悪い宇宙人の累と知れる。ここは一番、地球人に化けずばなるまい。(と、小さいマントをはずし、脇座にあるソフトをかぶり、カバンをもつ) ヤ、これでよからう。かたどおり、よう化けたと存ずる。(と、体を見まわす)

狐 (ちようどそのころ、常座で人間の衣裳になり、同じようにソフトをかぶり、同じ型で) こちらも、かたどおり、よう化けたと存ずる。

宇宙人B (狐の方に気づいて) ヤ。

狐 (狐も宇宙人に気づいて) ヤ。

宇宙人B あれへ地球人の仲間がまいったそうな。

狐 あれへ憎い人間の仲間がまいったそうな。

宇宙人B そうじゃ、悪い宇宙人とけどられてはならぬ。地球人らしう、そろりそろりとまいろう。(と、ソフトをかぶりなおし、様子をして、常座へむけて歩み出す)

狐 そうじゃ。きゃつをたらかすには、自動車、自動車。クワイ、クワイ、クワイ、クワイ、パッ。

(と、手をうつと、狂言座にある布をはらう。と下から出てくる自動車のつくりもの——「梓組」だけ) ソリヤまいるぞ。ブウブウブウ、ブウブウブウ。(と、自動車のつくりものの前にはいつておして行く)

(宇宙人と狐、それぞれ舞台をいまわりしていれかわり、車は正中あたり、宇宙人は目付柱のあたりで)

宇宙人 B ヤ。

狐 ヤ。(車からおりて)

宇宙人 B きやつ、妙なものに乘っておるわ。

狐 きやつ、どうやら田舎者そうな。

宇宙人 B こちらの正体見破られはせぬか、ちとこわものじゃが、声をかけてやろう。

狐 田舎者は、かえって狐けものに鼻がきくゆえ、ちとこわものじゃが、声をかけてやろう。

宇宙人 B 申し。

狐 (同時に) 申し。

(双方、びっくりしたように相手の返事を待つ。お互いにさぐりあいのようになつて)

宇宙人 B 物申し。

狐 (同時に) 物申し。

宇宙人 B なんてまねをなさる。